
愛と憎の魔術師

霜月舞鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と憎の魔術師

【Nコード】

N2912Z

【作者名】

霜月舞鶴

【あらすじ】

彼女の魔術師志願の理由は全て一年前。魔術師と対する黒魔術師によって住んでいた教会は焼かれ、自分以外は殺され、そして——自分も殺されそうになった時、救世主は現れた。黒魔術師に復讐するため、そして救世主の恩に報いるため、魔術師育成学園「空架学園」の門を叩く。

そして二十五十年入学式当日——それは始まる。

第一話「入学」（前書き）

- ・この小説は一次創作です。実在する人物、出来事、団体等とは一切関係ございません。
- ・誹謗、中傷などはお辞め下さい。

第一話「入学」

空にびつしりと詰まった灰色のどよりとした雲が、バケツをひっくり返したような雨を降らす。その雨は、地面に死屍累々（ししるいるい）と転がった人々の血を雨水で流して小さな川にすることはあれど、その人々の居た教会を燃やす真っ赤な火までは消してくれなかった。

死屍累々と転がる人の中、十四、五歳であろう少女は血と雨に濡れながらも呆然と立っていた。燃える教会の中から、頬に逆ペンタクルの刺青をした若い男が出てきて、少女に気付いた。

男は黒魔術師だ。かつて魔術師をこの世から消そうとして絶滅寸前まで追い詰めた人々を恨み、復讐して今度は自分達が世界を支配すべきだという思想を掲げている者達だ。頬に黒魔術師の証である逆ペンタクルがあるからわかった。

それがわかって、少女の頭は混乱するばかりで、ろくに言葉も紡げない。

そして、少女がおろおろしている間にその男の掲げた手の平に山一つ破壊できるのではと思ってしまうほどの威圧感や殺気を纏った半透明の巨大な刃が現れる。

「起きて……！」

逃げなければ——この倒れている人達を、ついさっきまで冗談言いついて一緒に暮らしていた人達を起こして、逃げなければ。少女の思考は、口はそれを紡ぐのに、誰一人起き上がってくれない。

半透明の刃が少女に向かって放たれる。地面を削り、倒れていた人達を衝撃波が巻き上げる。

（駄目だ……！）

少女が目を閉じようとした。

がいんっ、という音と共に、半透明の刃がいとも簡単に弾かれて、木端微塵になる。

少女の目の前には、少女を庇う様にして十代半ばらしき男が立っていた。その男の濡れた服の襟には、ペンタクルの描かれたバツジが付けられていた。

それから約一年後、今——西暦二千五十年、四月九日。

その少女——神田氷柱は今日入学する空架区にある魔術師育成学園——空架学園の立派な鉄扉をくぐった。

髪は太陽の光を反射するような腰まである艶やかな黒長髪で、目は黄色で女子にしては鋭く、肌は白く透き通っており目鼻立ちもすつきりしている。気の強さを窺^{うかが}わせる端整な顔だちだった。女子らしく線の細い身体は白色のブレザータイプの制服に包まれていた。

氷柱は誰とも言葉を交わさず、入学式会場という立て札のある体育館に足を踏み入れた。途端——ステージ側を前方とするのなら、出入り口側に並べられている木椅子を後方とした——に座った親たちの視線が氷柱に突き刺さる。氷柱は軽く会釈して足を進めた。

(……全く、噂好きなんだから)

黒魔術師の餌食になった教会の子が居る——そんな潜めた声が氷柱の耳にも入った。氷柱は出来るだけステージに近い、噂話の聞こない位置にあるパイプ椅子に腰かけた。だが、ちらほらと座っている新入生の好奇の目も痛い。親同士の噂話は自然と子供の耳にも入る、ということらしい。

氷柱は静かに目を閉じて、好奇の視線を受け流すことにした。

肩が控え目につつかれる。氷柱は薄らと目を開け、そして自身が眠っていた事に気付いた。

肩をつついたのは、隣に座っている女子だったらしい。明るそうな印象を抱く女子が氷柱の視界に入った。

「呼んでるよ、神田さん」

そう言って女子生徒はステージを指さす。ステージの上にはマイクを握った若そうな男性が居た。

「神田さん、新入生の神田氷柱さん！」

「……あ、はい」

氷柱は首を傾げつつ立ち上がる。好奇の目が再び向けられ、氷柱は小さく溜息を吐いた。

「入学式が終わった直後、生徒会員が迎えに来ますから、それに従って生徒会室に行くようにしてください。連絡は以上です。では、入学式を終了します」

質問の間も与えられず、話が一方的に切りあげられる。氷柱は眉根を寄せて腰を下ろした。

（何だったんだろう）

しかし入学式終了後といえば、すぐにクラスに入って自己紹介をするはずだ。生徒会室に行つて良いのだろうかと悩んでいると、後ろに座つていた新入生達が不格好な列を作つて体育館から出ようとしているところだったので、氷柱もそれに続こうとして——ステージ上からの鋭い視線に逆らえず、氷柱は椅子から立ち上がりずに体育館から出ていく新入生たちを見送った。

続いて背後で保護者達が出ていく気配がした。その動作は新入生よりも静かで速く、あつという間に体育館には教師らしき人物数名と氷柱、誰も座つていない椅子だけになった。

（入学式……寝るんじゃ無かった！！）

氷柱はかくりと首を落とす。全く意味がわからない。

項垂れている氷柱の頭に、影が落とされた。氷柱は反射的に顔を上げる。其処には上級生らしき女子生徒が居た。

髪は金色、というよりはプラチナブロンドと言った方がしっくりくる色で腰まであり、目は自信が見え隠れする茶色、肌は白く透き通っていて何も塗られていないように思われるが、唇には薄い色の口紅が塗られており、何処そのモデルの様な顔だちだった。胸も多分氷柱よりはある。そして、何より氷柱の目を引いたのは——襟につけられた、ペンタクルの描かれた小ぶりのバジだった。

「初めまして、よね？ 一年生の神田氷柱さん」

「は、はあ……初めまして」

「私は高天原アイリ。たかまがはら二年生で生徒会書記、訳ありで生徒会会計代理もやっているわ」

そんな人がどうして、と尋ねそうになる氷柱を、アイリは片手で制した。

「事情は後で話すわ。ついて来てちょうだい？」

辛うじて疑問形になってはいるものの、有無を言わせない威圧感が其処にはあった。

（拒んで荒事にするつもりもないし、何より先輩と波風たてたくないし）

ただでさえ目立っている氷柱だ。これ以上目立ちたくはない。

「じゃ、行きましょうか」

氷柱は一つ頷くと、椅子から腰を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912z/>

愛と憎の魔術師

2011年12月10日10時49分発行